



■主な内容

第10回首都防災ウィーク展示と「みらくルTV」報告
 特集：集合住宅の歴史を踏まえて未来を考える
 UR 集合住宅歴史館（八王子）見学会
 集合住宅の変遷の展示を共に見て
 半世紀経った分譲型集合住宅に暮らす
 —2022年11月3日小川信子先生に聞く—
 都営青山北町アパートの略史
 コミュニティが育ちやすい環境と、建築の役割
 『住宅30年史—住宅局事業の歩み—』より、他
 被災地通信 28 富山県建築士会の東北被災地視察顛末記



旧都営青山北町アパートと周囲の都市
 景観を俯瞰する遠景の高層ビルの間
 に国立競技場・野球場を望む
 (2022年10月撮影：井出幸子)

第10回首都防災ウィーク展示と「みらくルTV」報告

The 10th Metropolitan Disaster Prevention Week Exhibition and Miracle TV Report

稲垣 弘子

INAGAKI Hiroko

2013年、東日本大震災の爪痕も未だ癒えない状況の中、首都圏で生活している私たちが被災し、生き延びて復興に向かうには、私たち自身が自ら防災に取り組むことが不可欠ではないか。そのような思いで「首都防災ウィーク」は始まり、2022年の今年10年目を迎えた。

2020年からはコロナ禍、オンラインでの開催を余儀なくされた。今年は人数制限の下、横網町公園内でのテントイベント、東京都慰霊堂内でのシンポジウムや展示も可能となり、「みらくルTV」と併用して、8月27日～9月4日開催した。

「みらくルTV」では8月27日（土）“岩泉町「だれでもフォトグラファ」の活動—「だれフォトニュース」の歳月を振り返りつつ—”をテーマに、松川、森田、宮本の三人で発表。「だれフォトニュース」は、最初は連絡用に作られたが被災地との交流ツールとして役立ち、復興の記録にもなっていることが伝えられた。

9月3日～4日、昨年巡回展を行った「被災から10年—UIFA JAPONの見た岩泉町復興への歩み」写真展を慰霊堂内で開催した。1日半の展示であったが、慰霊堂を訪れる人々が熱心に鑑賞し、アンケートにも岩泉町への励ましのメッセージが多数寄せられた。

In 2013, when the scars of the Tohoku Earthquake had not yet healed, it was essential for those of us living in the Tokyo metropolitan area to work on disaster prevention ourselves in order to survive and recover. The "Capital Disaster Prevention Week" that started with such a thought has now entered its 10th year.

From 2020, due to the Covid crisis, the event was forced to go online. This year it was held with a small group live and online.

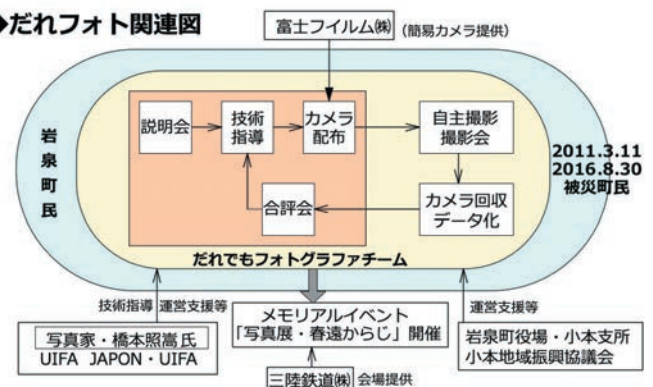
Miracle TV carried a report on August 27th about Iwaizumi Town's "Dare Photo" activities and the years of "Dare Photo News," as announced by Ms. Matsukawa, Ms. Morita and Ms. Miyamoto. It was reported that "Dare Photo News" was initially created for contact purposes, but has served as a tool for communication with the affected areas and also serves as a record of recovery.

On September 3rd and 4th, a photo exhibition was held in the Memorial Hall, titled "10 Years After the Disaster - UIFA JAPON's View of Iwaizumi Town's Reconstruction," which had been touring last year. It lasted for a day and a half, but the visitors to the Memorial Hall were enthusiastic about the exhibition, and the questionnaire included many messages of enthusiastic encouragement for Iwaizumi Town.



東京都慰霊堂内での「被災から10年—UIFA JAPONの見た岩泉町復興への歩み」写真展示

◆だれフォト関連図



2022年3月のUR集合住宅歴史館の見学をきっかけに、公共・民間の集合住宅の歴史とこれからを特集に組もうという声が上がった。また、単なる歴史や集合住宅論でなく、UR集合住宅歴史館を含めて3つの見学会あるいはインタビューなどを通じて、ニューズレターの読者の方々に、集合住宅の今と未来について考えていただくき

かけにできればと考えた特集企画である。(編集委員会)

Through three special tours and interviews, we hope to provide readers of this newsletter with an opportunity to consider the present and future of apartment complexes.

UR集合住宅歴史館（八王子）見学会 集合住宅の変遷の展示を共に見て
Tour of the UR Housing Complex History Museum (Hachioji):
Viewing an exhibition on the transition of housing complexes together

牛山 美緒

USHIYAMA Mio

5年ほど前にUIFAの見学会が行われた八王子のUR都市機構の集合住宅歴史館（旧技術研究所）が2023年度赤羽台へ移転することになり、移転前にもう一度見学に行きたいとの声に応じて3月10日に見学会が行われた。9名が参加し、集合住宅歴史館とKSI住宅棟を見学した。

集合住宅歴史館では、関東大震災（1923・大正12年）後の復興のために、日本で初めて本格的なRC造の集合住宅を東京や横浜に建設した財団法人同潤会の代官山アパートの「世帯住戸」「単身住戸」の復元住宅をはじめ、昭和30年代の公団住宅として蓮根団地の2DK（当時あこがれだったダイニングキッチン）、各住戸が専用庭を持つ長屋建の低層集合住宅である多摩平団地のテラスハウスの3K、そして前川國男氏設計の晴海高層アパートの廊下階住戸、非廊下階住戸などを見学した。皆熱心に見学し、「特に前川國男氏の住戸は見ごたえがあった。」「晴海の高層アパートの天井高は2,260^{mm}/m。低いけれど、欄間にガラスを入れていて、開放感あり」「住宅・建物の歴史そのものですね」などの感想が出された。

KSI（機構型スケルトン・インフィル）住宅棟では、集合住宅が継承され続けるために、特にネックとなる設備の更新について「可変性」の追求の成果を見学した。「リフォーム会社に勤務していたので、新入社員研修に使わせてもらいたかった。一日中いられるくらいだった。赤羽にも期待する。」など感想が出された。

2019（令和2）年、旧赤羽台団地のスターハウスを含む4棟が団地として初めて国の登録有形文化財（建造物）に登録され、八王子に展示されていた歴史的な集合住宅の住戸の内装は、2023年9月赤羽台に開館する「都市の暮らしの歴史を学び、未来を志向する情報発信施設『URまちとくらしのミュージアム』」に移設される予定である。オープン後には、また皆での見学会ができればと考えている。

The Urban Renaissance Agency's Housing History Museum in Hachioji, where UIFA JAPON held a tour about 5 years ago, will be relocated to Akabanedai next year. So a tour was held again on March 10.

The Historical Exhibition of Apartment Complexes includes restored "family units" and "single units" of the Daikanyama Apartments of the Dojunkai Foundation, which built Japan's first full-scale RC apartment complexes in Tokyo as part of reconstruction after the Great Kanto Earthquake (1923). It showed a 2DK unit (dining room, kitchen, and 2 rooms) in Hasune Danchi, a 3K unit terrace house in Tamadaira Danchi, a low-rise apartment complex with a private garden in each unit, and units in Harumi high-rise apartment buildings designed by Kunio Maekawa. Visitors commented, "The ceiling height of the high-rise apartment in Harumi is 2.26m, so it is low but it has a sense of openness due to the use of glass in the fanlight."

In the KSI (UR-style skeleton-infill) housing wing, we observed the results of the pursuit of "variability" in the renewal of facilities. "I worked for a remodeling company and wanted to use it for training new employees," a visitor commented.

In 2019, four buildings of the former Akabanedai housing complex, including the Star House, became the first housing complex to be registered as a tangible cultural property (building) in Japan, and the interiors of the units of the historical housing complex on display in Hachioji will be transferred to the UR Town and Life Museum, which will open in Akabanedai next September to display the history of urban living and to orient visitors to the future.



集合住宅歴史館
に向かう
写真：井出幸子

(参考) 赤羽台施設紹介動画

<https://youtu.be/Fmq7dd1cFpk>



UR都市機構の過去の調査研究 12～163号

(1965～2017発行) 1208件を検索可能

<https://open.ur-net.go.jp/search/lab/reportfile/>



半世紀経った分譲型集合住宅に暮らす
—2022年11月3日小川信子先生に聞く—
インタビューアー:宮本 伸子、薄井 温子、井出 幸子 (編)

Living in a Condominium Half a Century Later
-Ask Dr. Nobuko OGAWA November 3, 2022-
Interviewers:MIYAMOTO, USUI, IDE (editors)

1. 今のお住まいを選ばれるまでの経緯は？

このマンションに越す前は、同じ目白通り沿いのアパートに、一番ヶ瀬康子、中原暢子と隣同士で住んでいた。学生や研究仲間と、その共用の廊下で打ち合わせをしていたものである。

現在、居住のマンションは、1973年に、築3年の住まいを、知人から購入した。南北に縦長で、本を沢山納められそうな長い壁面があるのも惹きつけられた要因だった。北に面している住まいの購入を川添登に相談したところ、彼から「福祉建築を目指すなら、世の人々が陽に当たる様を見続けられるこの部屋が相応しいかも」と言われた。

2. 貴マンション管理組合の取組については？

当マンションの管理組合理事会では、日常生活の維持に関するソフト面と、建物全般に関わるハード面とに仕分け検討してきている。

建設時は、東京都安全条例（1950年）も区分所有法（1962年）も施行後であるが、その後の法改正や、現在求められる集合住宅の性能を維持することには課題が沢山ある。ここの管理組合は、理事会傘下に「100年委員会」という建築（ハード面）問題を検討する諮問組織を作り、かつ、建物の検証・アドバイスなどを行う専門コンサルタントに業務委託を行っている。

ピロティ他の耐震改修、区分所有の界壁の課題解消、遡及の手を緩めない消防法に合致した避難施設の追加整備、劣化が進む躯体・擁壁の改修、玄関扉の取り替えなど、修繕・改良工事等に反映させてきている。

3. マンションで、「将来について考えていること」は？

「100年委員会」に小川も建築の専門家として参画している。この名称は、旧耐震基準のこの建物の耐震改修を契機に、築100年まで維持していこうという意気込みでネーミングしたもの。理事会議事録によると、届出制をとっている部屋のリフォームが増えてきている。

「住み替え」も進行し、若い世代が移り住み始めている。

4. 長くお住まいですが、住み心地は如何ですか？

入居から50年経ち93才となった。職場に近く、交通も至便なことも、この立地に住み続けてきている理由だ。ここでは知り合いが何人かいるが、住民とはそんなに仲が良いわけではなく、都市居住者らしい暮らし方をしている。まだ、介護保険に頼らずとも生活を送ることができ、教え子や友人たちが頻りに訪れ、賑やかな生活が続いている。

今、毎朝掃除をしてくださる管理人と挨拶を交わしながら、この集合住宅の管理への取り組みの良さについて、思うことが多い。

1. Please tell us how you chose your current residence

Before I moved into this, I lived next door to Yasuko ICHIBANGASE and Nobuko NAKAHARA in an apartment on the same Mejiro Street. I bought my current condominium in 1973. When I asked Noboru KAWAZOE about purchasing a house facing north, he said, "If you are aiming for welfare architecture, this room might be suitable for you to watch people enjoying the sunlight."

2. Please tell us about the efforts of the management association of this condominium.

There are many issues related to changes in regulations since the time of construction and to maintaining the performance of the apartment complex as required today. The management association here has formed a "100 Year Committee" under the board of directors, an advisory body to study architectural issues, and has also outsourced work to a professional consultant who provides building inspections and advice.

3. Please tell us what this condominium is thinking about for the future.

I also participate as an architectural expert on the 100 Year Committee. The name was given with the intention of taking the opportunity of seismic reinforcement of this building, which was built under the old earthquake-resistance standard, to maintain it is 100 years old.

4. You have lived here for a long time, how is your comfort level?

It has been 50 years since I moved in. I have continued to live here because of its closeness to my work and convenient transportation. I have a few acquaintances here, but I do not get along with the residents that well and live a typical city-dweller lifestyle. I am still able to get by without long-term care insurance.



インタビューの様子。左側の書棚が入るかが、住まい選択の一つのポイントとなった
右側が小川信子先生（写真：井出）

都営青山北町アパートの略史

A Short History of the Toei* Aoyama Kitamachi Apartments

渡邊 喜代美

WATANABE Kiyomi

戦後の公営住宅は1945年(昭和20年)から始まった。戦災による半数を上まわる住宅焼失対応するため越冬用応急住宅建設から始まり、超高層、環境共生、高齢社会対応型住宅など現在に至るまで時代の要請と技術の進歩とともに歩んできた。この度見学した青山北町アパートの建設は1957年初頭から始まるも、現在は超高層の都市型公営住宅及び都有地を活用した民間の力をいかした事業への建て替えが進んでいるところである。

Postwar public housing began in 1945, starting with the construction of emergency housing for winter to cope with the destruction of more than half Tokyo's houses, which were destroyed by fire in the war. Construction of the Toei Aoyama Kitamachi Apartments, which we visited this time, began in early 1957, and it is now being rebuilt as a super high-rise urban complex and a private-sector project.

* Toei: apartment complexes owned by the Tokyo Metropolitan Government

コミュニティが育ちやすい環境と、建築の役割

The Role of Architecture and the Environment in Fostering Community

須永 倭子

SUNAGA Yoshiko

場の持つ不思議なイメージ

令和4年10月17日、UIFA JAPONが企画した建替前と建替後の、2つの都営アパートの見学会に参加した。各地のマンションを取材した経験から、建替えによる移住で、新旧コミュニティがどう引継がれたのかについて、関心があった。

最初に見せていただいたのは、旧都営青山北町アパート。低層フラット大小11棟の空いた建物が整然と並んでいた。全ての住民は新しい建物に引越し、誰も居ないにもかかわらず、ゆったりと取られた住棟間のスペースで繰り広げられ、人々のやり取りが目に見えるようだった。住んでいた人々の息遣いや子ども達の喧騒が聞こえるような、不思議な感覚に捕らわれた。

人の気配を感じさせない個の世界

次に旧都営青山北町アパートの住民が移転した先、都営北青山三丁目アパートを訪れた。超高層の建物で、共有部分を中心に口の字型に住戸が配置されている。片側が壁、片側にドアのある廊下はとても静かで、ドアの内側には人の気配が全く感じられなかった。3層毎に明かりが入る吹抜けとテラスも作られ、ベンチを置き交流スペースとしていた。

新しいコミュニティの創造

青山は都内の一等地。建物の集約化で生み出された空地は、周辺地域も含めて考えられ、景観や植栽により居心地の良い空間が生み出されている。ショップやレストランなども出来て、新たな地元を築きつつ有る。アパートの中ではあまり交流を感じさせなかったが、こうした環境を活用しながら新しいコミュニティづくりがなされるのだろうと思った。

The Mysterious Image of the Place

On October 17, 2022, I participated in a tour of two metropolitan apartments, one before and one after reconstruction, organized by UIFA JAPON.

The first place we were shown was the former Toei Aoyama Kitamachi Apartments. All the residents had

moved to new buildings, and although there was no one there, it was as if we could see people interacting with each other in the open space between the buildings.

A Space with no Human Habitation

Next, we visited Kita-Aoyama 3-chome Apartment, where the residents of the former apartment had relocated. It is a high-rise building with the residential units arranged in a square shape around a common area. Each of the three levels had a vaulted terrace with benches as a space for interaction.

Creating a New Community

Aoyama is a prime location. The vacant lot created by the consolidation of buildings was thoughtfully designed to include the surrounding area, creating a comfortable space with landscaping and plantings. Stores and restaurants have also been built, creating a new local community. I thought that new interactions could be created while utilizing this environment.



青山北町アパートは、昭和32年(1957年)から昭和42年(1962年)度にかけて、4haの敷地に中層RC造25棟、総戸数586戸で建設された。2カ所の児童遊園と、保育園・児童館を併設した団地だった。

①1階に保育所を併設したこの棟は片廊下式の住棟形式をとっていた。住民の子どもばかりでなく、近隣の子どもも受け入れていたという。今、隣接の超高層都営北青山三丁目アパートに、保育所・児童館が引き継がれ、民活棟「ののあやま」にはサービス付き高齢者住宅が配置された。

住宅 30 年史抜粋 『住宅 30 年史—住宅局事業の歩み—』より
 From "30 Years of Housing: The History of the Housing Authority's Business

青囲い 青山北町アパート事業期間

項目	年代	20	25	30	35	40	45	50
経済的背景		廃墟の中から復興へ	朝鮮動乱と特需景気	高度経済成長期 (産業と人口の都市集中)			低経済成長期 (G.N.P世界第二位) (物価の上昇・公害問題) (オイルショックと地価・物価の高騰) (円高不況)	
主な住宅政策		○応急住宅の供給 (S.20住宅緊急措置令公布)	○S.26公営住宅法公布	○「一団地住宅経営」方式の導入	○S.36木造都営住宅建設の廃止 ○S.35住宅地区改良法公布	○S.41住宅建設計画法公布一世帯一住宅 ○「都営住宅関連公共的施設等の整備に関する要綱」を制定	量から質へ ○一人一室 ○「地域開発整備要綱」を制定	○居住水準目標の設定 ○ストック改善の実施 ○「地域生活環境整備構想」による街づくり ○過密住宅地区更新事業の実施
標準床面積 (第一種住宅の規模単位m ²)		木造 簡平 33.0 中耐 36.3	簡二 33.0	33.1 33.1 39.7 39.7	36.4	43.0 43.0	46.0 47.0 49.0 52.0 57.0 59.0 62.0 64.0 66.0	50.0 54.0 55.0 57.0 61.0 66.0 68.0 71.0 73.0 76.0
代表的な室構成 (数字は畳数を示す)		6.3.K 8.6.K	4.5.3.K 6.4.5.K	6.D.K	6.4.5.D.K		6.4.5.3.D.K	6.4.5.4.5.D.K 6.4.5.D.K
模浴室					中層 1種住宅の一部に設置 高層 2種住宅の一部に設置	全住戸に設置 全1種住宅に設置	全住宅に設置	全住宅に設置
特目住宅							車イス使用者向け住宅(ハーフメイド方式)	老人室付住宅 6.6.4.5.4.5.D.K

港・青山北町
Aoyamakitamachi Housing

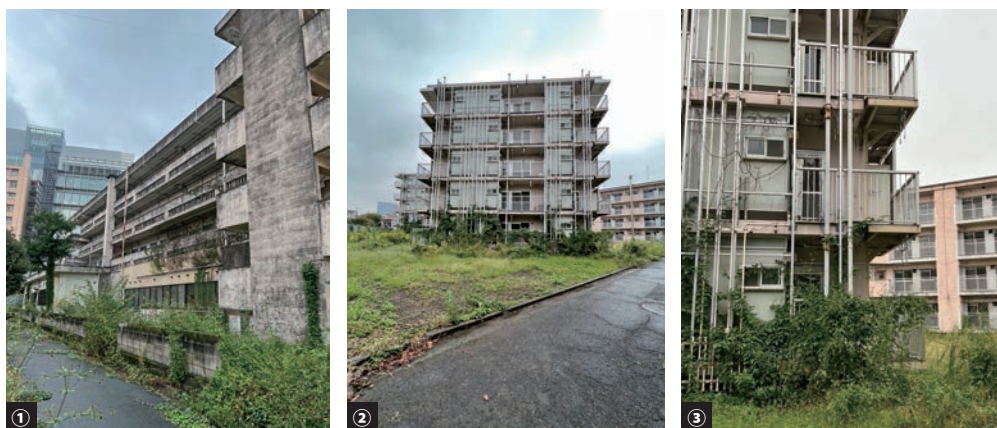
右手が建替前の住宅





昭和 20-21 年度 (1945 年 - 1946 年度) に供給された木造 2 階建の越冬住宅 (左写真) が昭和 32 年 (1957 年) RC 造への建替が開始された。

PC 型 -12.0 坪
ポイント型式。配置上の景観をねらったり、不整形な土地を有効に利用する際使っている。



②③中でも目を引く住棟はポイント型と言われる 3 戸のスリムな住棟である。昭和 32 年 (1957 年) の計画当初は近隣に銭湯が数件あったこともあり、浴室なしの住戸 (上図参照) だった。年表にもある様に、浴室を併設する様になるのは昭和 36 年 (1961 年) 以降で、供給済みの住戸の納戸を浴室に変えたり、このポイント型の様に、バルコニーにユニットの浴室を設置した。外部に給排水管を這わせた姿を、ポンプドローセンターなどとしていた様だ。この棟は避難経路確保のために側面にバルコニーを増設し垂直避難タラップを設けるなど消防法への遵法の経緯がうかがえる。

中段資料: 『写真集都営住宅建設のあゆみ 1945 ~ 1961 年』昭和 37 年 3 月 31 日発行 東京都住宅局刊

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2022年12月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

URL :http://uifa-japon.com

被災地通信 28

富山県建築士会の東北被災地視察顛末記

清本 多恵子

Toyama Association of Architects and Building
Engineers Made a Study Visit to the Disaster-
stricken Areas in Tohoku. KIYOMOTO Taeko

初めて、富山県建築士会の方が大型バスで宮城入りして下さったのは東日本大震災の翌年、2012年7月のことだった。比較的災害の少ない富山県では防災の意識が低いことに危機感を感じて、意識向上を目的としたことだった。2回目は震災から5年後の2016年10月。防災集団移転地の造成が終わり、建設が始まろうとしている女川町竹浦地区を視察していただいた。

2022年9月23日～25日に三度、東北の地に足を運んでいただく。今回は岩手県一関市から、南下する計画だ。震災から、11年が経過し、巨大防潮堤も出来上がり、大きく姿を変えてた被災地の現実を見ていただきたかった。陸前高田市では岩手士会の永田さんと合流し、お話を聴く。気仙沼市に移動し、大谷海岸、小泉海岸を視察する。夜は追分温泉で美味しいお料理とお酒を堪能する。



「追波湾テラス」と追波湾

翌日は南三陸町へ行き、宮城士会会員で町職員の大山さんに案内していただく。十三浜では避難所でリーダーをなさった鈴木さんから地域のコミュニティの力で、避難生活を乗り切ったお話を聴く。工学院大の後藤治先生が白浜に作った復興住宅がペットと泊まれる宿になった追波湾テラスを見学。海が美しかった。女川で宮城士会の木津さんがかかわったまちづくりのお話を聴き、まちあるきをする。夜は仙台支部の「福祉キャラバン隊」と富山支部の「かぐてんぼう隊」*の活動報告をしてから、交流会で大いに盛り上がる。

三日目は仙台市蒲生の日本一低い山・日和山登山の後、山元町を見学。福島県に移動し、東日本大震災・原子力災害伝承館を見学する。車4台をLINEで繋ぎ、リアルタイムで地元の福島士会遠藤さんの解説を聴きながら、被災した現場の今を車窓より臨む。道路一本を挟むと、中間貯蔵施設のエリア、帰還困難区域、特定復興再生拠点区域であったり、なんとも割り切れない気持ちになる。あわただしくも実り多き、三日間で

*家具転倒防止を手助けするボランティア隊のこと



仙台市蒲生の日和山(標高3m)にて案内人との記念撮影 富山県15名、宮城県3名(左端が筆者) 後方に見えるのが防潮堤

■役員会報告

2022年度第3回9月7日 対面およびオンラインによる会議その後、来日中の成瀬氏(在仏)によるお話に布野先生も出席 第6回 Web 交流会講師武村雅之先生準備 第10回首都防災ウィーク参加報告 住まいづくりの勘所進捗報告 この指とまれ北青山都営住宅見学及び123号企画報告 122号発刊報告

2022年度第4回11月18日 オンライン会議 第6回 Web 交流会準備 「全国まちづくり会議」出展報告 ホームページ部会報告 住まいづくりの勘所進捗報告 NL123号進捗報告

■編集後記

叔母の後見人手続きでアタフタ(薄井) / 現役時代「住宅50年史」作成に参加して「都営住宅建設の流れ」をA4で4ページ帯状に1年がかりで作成したこと(力作ですぞ!)をなつかしく思い出しつつ…(渡邊) / 家族のワクチン接種のスケジュール管理でばたばた、娘の受験が迫りはらはら(杉原) / 集住しながら隣を知らない都市居住は気楽だが、首都直下地震対策を避けて通れなくなりそう(井出) / 集住が増加している現代、年代物の集合住宅を使い続けることは社会の大きな課題だと考えた企画でした(編集長:宮本)